

俳句雜誌



空

令和元年5月10日発行

第17卷2号

通巻第84号



2019・4・5

**SORA** 84号

# 前 傾

柴  
田  
佐  
知  
子

北窓を塞ぎて北を忘れけり

冬草や戦史の端に父が立つ

逢へるかもしれぬ雪女になれば

冬麗や母に肌着を買ひ足して

如月や抱くやうに拭く床柱

跳箱に挑む前傾冴返る

石ひとつ持つて帰りし磯遊び

—「W E P 俳句通信」より—

風船を貰ひて街に戸惑へり

引き出しの中はがらんと新社員

春深し芸を終へたる猿に椅子

鍵かけぬ土蔵を覆ふ紅椿

夕暮の風つのりくる落し角

ひとりづつ光背を得て青き踏む

福岡 高倉 和子

東京 中田みなみ

納屋の戸を板で繕ふ冬はじめ

毛糸編む一と編み毎に生繋ぎ

落葉焚く周りの草を焦がしつつ

朝まだき窓の氷の羽毛めく

闇汁の底に残りし魚の骨

焚火の香好きな高雄の山鴉

一軒を搦めとりたる虎落笛

焚火灰舞うて法螺鳴るお火渡り

雑踏の中のひとりは雪女

焚火踏む祈祷地霊も灰まみれ

杉山に闇の片寄るどんどこかな

爪先を締めて焚火を踏むを見る

おしくらまんじゅう大地の隅へ移動して

切通しの幅の風音冬泉

寒の水飲みて鏡の中の顔

バス待つや樫の値を窓越しに

長崎 荒井千佐代

福岡 柴田志津子

ザンボアの熟るる海坂夜の弥撒へ

稜線を凌ぐ聖塔雁渡し

目でありし穴を風抜く鴟の贄

生よりも死に近くをり林檎食む

愛の羽根飢ゑを知らざる子の胸へ

竜神へ木橋の軋む冬どなり

かけ声で艇を頭上へ柿日和

人よりも墓多き村鱈起し

髪切つて踏み出す一步水ぬるむ

円墳のままに草木の芽吹きけり

掘割の水を豊かに雛祭

春夕べ男がのぞく姫鏡

声かけて摘ませてもらふ山椒の芽

猫の子が鼻を突つ込むもぐら穴

剪定の音やみし窓ひらきけり

たつぷりと齡いただき蔵餅

埼玉 服部 早苗

鯛焼や文士通ひし団子坂

全天に枝投げあげて櫻枯る

福引の子の迷ひなく引く瞳

人日や銀行へゆき駅へゆき

臘梅や吉のみくじを細結び

光量の足らぬ夢なり冬堇

三つ星の正しきひかり結氷期

大寒やビルが切りとる空の青

福岡 岸 洋子

絵馬なべて蹴上ぐる白馬梅の花

年重ね知ること楽し福壽草

雪しぐれ耳のみ聴きベッドの父

睫毛長きみどり児囲む四温かな

ふるさとの広き夕空枯鶏頭

幕を引くやうに日暮るる枇杷の花

義理ひとつ果たせし足袋を脱ぎにけり

ふんだんに冬波を見て菓喰

北九州 深川 淑枝

広島 戸栗 末廣

綿虫の光負ひ飛ぶ古墳口

沼の上を絮の飛び交ふ冬はじめ

雪降ると王の柩の漆枯れ

短日のことりと自動販売機

甕棺の胴ふつくらと冬桜

北山の杉の匂へるしぐれかな

闇吸ひし雪の翳差す玉くしげ

綿虫のさみしき顔をてのひらに

覗くたび鏡の古りぬ雪女

初句会上座下座のなかりけり

ものの怪の足音背にきく湯ざめかな

龍太忌のはや紅梅の深空かな

狐火を信じ咽せゐる粉薬

山を見て風見て梅を探りけり

雪嶺に夕映え残るかりもがり

去年今年ガラス障子に厳島

福岡 角野良生

水郷のしぐれはいつも水面より

羽搏ちては這ふてゆくなり冬の蜂

若狭には若狭訛の鱒起し

切干に青首の色ところどころ

起きぬ子を払ひて布団干しにけり

軽口で終はる診療花八手

なんとなく突ついてゐたり薄氷

湯気立てて仔牛生まるる十二月



大野城 森 田 明 成

旧ぶほど狛犬やさし花柵

母絶えずねんねこの子に声かくる

友逝きてこの世狭まる寝酒かな

雀来て賑はつてゐる枯葎

冬ざくら閉校の碑の新しき

長崎 坂 口 晴 子

(千波悠改め)

蒼穹へ投げて大鷹放ちけり

一笛の強し短かし鷹を呼ぶ

鷹匠の正装といふハンチング

鷹をもつ肘を高めに鷹師かな

獲物ねじ伏せたる鷹の身じろがず

太宰府 西住三恵子

土つきの大根洗へば太くなり

検診を受けねば無病年の暮

二番目に生まれて老いて冬帽子

ねむりても点滴つづく冬至かな

子守唄途絶えし里や実南天

兵庫 大 西 乃 子

クリスマスイヴ饒舌な赤ワイン

狐火の鏡の中にゆれてをり

妬心などきつぱり棄てし雪女

初松籟いよよひとりと思ひけり

恋の句の上五を忘れ女正月

北九州 河原敬子

報恩講僧は誰にも声かけて  
冬日和庭に出づれば猫もゐて  
古墳へと枯蟪螂を跨ぎゆく  
失敗は笑つてすます年の暮  
去年今年生者に死者に生かされて

長崎 松尾龍之介

山の気を肺の中まで初景色  
冬ざれや蘇鉄の幹の粗づくり  
去年今年風なすままに水の皺  
憂鬱が綿虫を地に引き戻す  
日脚伸び水栽培の真白き根

千葉 原友子

稜線の上に鳶の輪鋏始め  
紙縫りめく煙ひとすぢ初山河  
敷居ある家こそよけれ嫁が君  
あれこれと元に戻して四日かな  
眼裏に凜と父あり蔵開き

直方 石橋幾代

病みし身の和らいでゐる日向ぼこ  
着ぶくれてすでに晩年めく思ひ  
足で探りて湯たんぽを確かむる  
赤々と雪の降りだす繁華街  
客去りてもとの闇なり鏡餅

福岡 永淵 恵子

護摩焚きの山より冷えの降りて来し

剃刀を当てられてゐる近松忌

選ばれて大き聖樹となりにつけり

餅撒いて大団円の里神楽

冬籠る砦のやうに本を積み

岡垣 田中とし江

笠雲を豊かに山の眠りけり

開拓村焚火跡より日の暮るる

益荒男の槌もて締むる大注連縄

初松籟乳鋏は青き鏘深め

臘梅のまろき香りの夜明かな

福岡 田代 貞香

メモ紙に未完の俳句雪が降る

今更に娘が欲しき夕霞

知らぬ子のおじぎして行く実千両

魚跳ねて光となりぬ旧端午

もがくほど怒る幼児着ぶくれて

粕屋 吉田 菫

胸像の半分は闇憂国忌

雪ぼたるひと塊の無縁墓

涸滝や一音もなき雑木山

丹田より声を出し合ふ成木責

突如目の動きひらめとなりにつけり

糸川 宮井 知英

初鏡妣と見紛ふ我が居り

母のもの母の如着る女正月

雪晴や烟り立ちたる四方の山

早々に鶏から奪ふ寒卵

てのひらに葉あれこれ春近し

太宰府 山本 則男

かいつぶり水の入口すぐ消ゆる

青空のみちびいてゐる初天神

輪飾を揺らし渡船の引き返す

梟に尋ねてみたきことありぬ

風花や堂に瘦せたる竹箒

直方 曾根 富久忠

ラグビーのゴール突つ立つ河川敷

流木は鯪の形に冬ざるる

日の当る車庫に満車の消防車

鬣は卷毛木枯の狛犬

球体の給水タンク冬青空

東京 山田 正子

聖夜来る汽笛尾を引く港町

暖炉の炎聖母マリアは素足にて

どの酒も佳き名をもらひ初荷かな

久女忌やつむじ二つの女の子

ジョーカーをまさか引くとは年女